第６学年　国語科の実践

１．単元名　　登場人物の関係を捉え、人物の生き方について話し合おう「海の命」
（全 11 時間　本時 10 時間目）

２．単元目標

○文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げることができる。
○人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。
○文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。
○語句と語句との関係、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。

３．「ひびきあう三の丸の子どもたち」をめざすための指導の工夫

研究課題「子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成」
手だて・・・子どもの願いや思いを見とった単元構想と授業づくり
高学年ブロックテーマ「仲間への理解、自立する自分」
・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切にする姿
・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

＜児童の実態＞

素直で明るい子どもが多く、意欲的に学校生活を送っている。下学年との交流をとても楽しみにしており高学年らしく意識した生活を送れる児童が多い。

国語の学習場面では、物語を読むことが好きな児童は７割いる。読むことになれ親しんでいる子どもが多いと言える。その一方で、「考えを発表するのは難しい」と感じている児童が６割を超えているため、一人ひとりが文章を読み、感じたことや考えていることを基に交流しお互いの考えを深めていく手立てが大切であると考える。

前期は「帰り道」や「やまなし」の学習を通して主人公の気持ちを想像して読んだり、自分の体験と重ねて読んだりした。場面と場面をつないで読む、似た言葉と比べて読むなどの読み方の種類を活用しながら自分の読みをつくる学習をしてきた。また、自分の読みを考える際に、中心人物、対人物を捉えながらキーワードとなる言葉に着目し、視点をはっきり与えると根拠をもとに自分の考えをまとめることが少しずつできるようになった。

＜聴く・話すについての指導＞

「聴く」については、教師の発問や友だちの考えに対して目と耳と心で聴く、話す人を見て最後まで聴く、メモをとるというルールに加え、自分の考えと比べて感じたことを素直に表現できるような雰囲気を大切にしてきた。興味のあることには反応がとても強いが、興味のないものには反応が弱いという

子どもらしい一面がある。その時には教師から「どう思う？」と全体に改めて問いかけるようにしたり、友だちと交流したりして自分の考えに自信をもてるようにしている。

「話す」については、考える時間を十分確保し、まずは自分なりの考えをもつことの大切さを伝えてきた。そして、話題に沿って自分の出番を考え、発言や質問をすることができるように取り組んできた。また話し手として、どの言葉を使えばよいのか、どのように順序立てて相手に伝えればよいのかを考えながら話ができるように、指導を重ねている。

今年度はコロナ禍という状況で、対面での活動が難しい中でのスタートであった。話し合い活動では、十分に耳を傾けて聴いたり、マスクをしたまま相手に伝わるように話したりすることを意識できるようにしてきた。徐々に対面での学習が可能となり、学校生活の様々な場面で、「聴く・話す」を意識した活動を取り入れられるようになってきた。ペアトークやグループトーク、学級での話し合いなど、必要に応じて表現する場も工夫している。相手意識をもった「聴く・話す」活動にしていく中で、聴くことのよさを味わうとともに、自分の話を聴いてもらえる心地よさを実感できるようにしてきた。

＜これまでの関わり合い・ひびき合い＞

これまで、学習に限らず様々な話し合いをする場面をつくってきた。聴き手も話し手も相手意識をもった話し合いができるような声かけをし、常に自分の考えと比べながら話し合いに参加することの大切さも伝えている。思いつきで発言するのではなく、友だちの考えや話題の全体像を想像しながら話し合いに臨む姿が見られるようになってきた。また、児童のつぶやきや、自分から発言することに消極的な児童の考えを教師が拾い上げ、ひびき合っていけるよう、座席を工夫しながら意識して取り組んでいる。

クラスイベントや総合的な学習の時間の活動内容については、主に発言する児童を中心に活発な話し合いになることが多い。自分の生活に関係する事柄や興味がある話題に対しては、進んで話し合い、相手の話を聴き自分の考えを深めることができる。クラス全体での話し合いの前にペア、4人グループで共有したり、交流したりするなど意欲的に関わり合える学習場面を設定することで、話し合ったことが自分の思いを強めたり、考えを深めたりするひびき合いの姿をめざしたい。

4．単元と指導について

＜単元について＞

本単元の設定（学習指導要領　第６学年）

〔思考力、判断力、表現力等〕読むこと
（１）オ　文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。
　　エ　人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。
　　カ　文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。
〔知識および技能〕
（１）オ　語句と語句の関係、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して語や語句を使うことができる。

「海の命」の作者である立松和平の作品は自然・労働・身体へのこだわりがある。創作絵本では命リーズ７冊を刊行している。その中の教材文となる「海の命」は、４つの場面で構成されている。

中心人物「太一」が村一番の漁師に成長する過程を様々な人物との関わりから描かれている作品である太一の成長を通して、読み手は生きることや自然との関わり方、命について深く考えることができる。

語り手が太一の視点にそって語っているが、心情について直接表現されていないところが多い。そこ

で、読み手の叙述を基にどのような心情の変化があったのかを想像しなければならない。この作品は海やクエに関する情景描写は美しく、比喩や擬音語、色彩語、擬人化された表現、海に関する象徴的な表現に着目することで、太一が体験している海の世界をより深く味わうことができる。

＜指導について＞

本単元の学習導入前に命シリーズ６冊を読み聞かせ、立松和平作品と子どもたちと出会わせる。読書体験を土台に、「立松和平さんの他のお話も読んでみたい。」『海の命は、どんな話だろう。』と、知的好奇心をもって単元の導入時に作品と出会えるだろう。また、立松和平さんの作品を誰もが手に取れるように教室に置き、作者の作品に数多く触れさせることにより、立松和平が描く内容に共通して感じられる自然・労働・身体へのこだわりを子どもたちに味わわせたい。

本単元の導入では初発の感想をもち、みんなで考えたい疑問や心に残ったこと、面白く感じたところや話し合いたいところをまとめ、学習問題をつくっていく。物語全体を通して、さまざまな表情を見せる主人公の人物像について疑問をもち、「どうして太一はクエを殺さなかったのだろう？」という問いが生まれると予想する。その問いから人物像を捉え、クエに対する太一の変容を読むことからクライマックスも捉えられる。はっきりとした個性をもった魅力的な登場人物、緊張感のあるクライマックス、共感しやすい主人公の変容など、登場人物の気持ちの変化や性格について場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像させたい。太一の成長と時の流れを追ってクエに対する太一の変容を読むことから、主人公の成長とを結びつけ、子どもと読み進めていく。

子どもが自分の考え、友だちの考えをノートに記録することにより思考を整理し、深めることで学力の向上に繋げられると考える。そこで分かりやすく、学習の流れがつかめるような板書計画をしっかり行うことで児童も振り返りやすく次の学習につながるノートになると考えた。ノートに書く意味をクラス全体で確認し、大切に扱うことを指導した。また、必要に応じて即時に全体で共有できるようにオクリンクを活用することもあった。ノートでは高学年に見られる小さい字や薄い字について学習の足跡としてどうなのか、カラーペンについても３色くらいが見やすいのではないかとみんなで考えた。板書を写すだけではなく必要なことを書き写し、考えや感想を整理して書き、記録する大切さに気付かせた。中学生に向けて「適切な速さと正確さ」を求め、絵や図、矢印などの記号を使い、大切な言葉を囲んだりするなど指導した。クラス全体にはわかりやすいモデルとなるノートを紹介したり、授業中、授業後に評価をしたり助言をした。

本時に子どもが解決したい問題は「どうして太一はクエを殺さなかったのだろう？」である。人物像を追いながら太一の成長を読み取ったところで、海の命」の太一の人物像について考えたい。」という思いを高めるのだと考える。太一はおとうの死、与吉じいさの死を経験しクエと出会うことから「クエのことをおとう」と考える児童が大半を占めるのではないかと思う。しかし、「クエは海の恵み・命」と考える児童など、考えの違いやずれが生じ、問題を焦点化することができると考える。そして、それまでに読み取ったことや叙述に基づいて考えを伝え合うことによって、自分の考えと友だちの考えとの共通点や相違点に気付き、太一の人物像を自分なりに捉える姿をひびき合いの姿とする。登場人物の人物像や父の死をきっかけに瀬の主クエに対する太一の考えや、思いの変容を焦点化するための問い返しをしたりする。また、友だちの考えから、自分の解釈を友達と交流し、気づくきっかけとなるようにしたい。

5.　単元構想　６年国語　登場人物の関係を捉え、人物の生き方について話し合おう「海の命」　（全 11 時間）

単元目標	○文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げることができる。 ○人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。 ○文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。 ○語句と語句との関係、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。

読書タイム
立松和平さんの作品の読み聞かせ
学級文庫に置く

「命シリーズ」山のいのち・木のいのち・川のいのち
田のいのち・街のいのち・牧場のいのち

道徳：命って何だと思う？

文章を読んで理解したことに基づいて、感想をもつことができる。【思】

「海の命」はどんなお話かな？①②③

題名読み・全文通読・初発の感想をもとう①　（オクリンク）
・生き物が出てくるのかな。
・~~読んだことあるよ。~~
・海も森と同じで生きているってこと？
・「いのち」じゃなくて「命」なのかな？
・海の命って何のことだろう
・お話を読んでみたい。
・どうして海が命なのかな？

絵本の挿絵を用意して、想像を広げる。

物語の内容を確認しよう③
・登場人物は？
・主人公は太一
・対人物は、クエかな？
・クエは魚だよ。人じゃないよ
・太一は漁師になるけど大きなクエとは戦わない話
・お父・与吉じいさが亡くなっても太一は漁師になる話し話
・太一はどんな少年なんだろう？

登場人物と場面の確認をする。
難読語の理解をおさえる。
中心人物太一と対人物与吉じいさをおさえる。

お父はどんな人なのかな？⑤
、・海が好き
・海のめぐみを大切にしている。
・海に感謝している。
・海から命をもらっていると思っている。
・まじめ
・やさしい
・村一番の漁師なのに自慢しない父
・ロープに巻かれて亡くなった。
・クエと戦った。

太一
・悲しい
・寂しい
・尊敬していたのに。
・もう一緒に漁に出られない
・どうして与吉じいさの弟子になったのだろう？
・お父と与吉じいさは同じ漁師だからかな？

地の文に着目して「語り手」の「太一」に対する見方を捉えることができる。【思】
「太一」と「お父・与吉じいさ」の性格や関係性について、想像しようとしている。【態】

どうして与吉じいさに弟子入りしたのかな？⑦
・父と同じ海で漁をやりたい。
・漁のやり方は違うけど、父のようになりたい。
・~~海をもっと知りたい。~~
・むりやり弟子になった。
・海で生きていけるように。
・太一のために厳しいけど一生懸命だった。
・お父と与吉じいさは同じなの？

文章を読んで理解したことを自分の考えをまとめている。【思】

お父と与吉じいさは同じ漁師なのかな？⑧

同じ
・海で生きていた。
・漁師
・海の命を大切にしている。
・海に感謝している。
・海の恵み・千匹に一匹でいい
・太一に海で生きて欲しいと思っている。

違う
・漁の方法→もぐり漁・一本つり
・漁の魚の種類→鯛:サザエ等
・亡くなり方

「お父・与吉じいさ」の優しさとまじめさが共通していることを読んでいく。

初発の感想を交流しよう②
・どうして誰にも話さなかったの？
・**クエを殺さなかったのかな**
・お父はすごい
・太一がかわいそうだけど強い
・与吉じいさとお父の漁のが違うのに弟子になったのだろう。
・お父の死で母も悲しんでいる。
・母の登場が少ない。
・与吉じいさは太一に厳しすぎる。
・クエってどんな魚なのかな？
・瀬って何？
・もぐり漁・一本つりはちがうのかな

感想交流の中で、感想が集中しているところや、ずれのあるところを整理し、解決していきたい問題を明確にしておく。

太一ってどんな少年なのかな？④
・海が好き
・お父の背中をみて漁師になりたい。
・~~お父の亡くなった瀬にわざわざ行っている。~~
・村一番の漁師の父にあこがれている。
・父のことを尊敬している。
・自分のことを自慢しない父はすごい！・
・父はかっこいいと思っている。
・やったこともないのに、漁師になる。
・がんこ
・意見をまげない
・やり通す子かもしれない。
・勇気がある。

人物像等を想像し、表現効果を考えている。【思】

与吉じいさってどんなおじいさんなの？⑥
・一本つりの漁師
・きびしい
・一生懸命・まじめ
・やさしい
・鯛を１日に２０ぴき釣っている。
・太一にこの海で生きて欲しいと思っている。
・~~太一を支えたい。~~
・よくばらない。
・海の命を大切に思っている。→「千匹に一匹でいい」
・必要なだけ釣る。
・海に感謝している。
・海が居場所

まとめた意見を共有し、自分の考えを広げている。【思】

語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して語句を使っている。【知】

母はどうして登場したのかな？⑨
・物語の内容に関係ない。
・あまり登場しない。
会話文がない。
・~~いてもいなくても内容は変わらないと思う。~~
・「ある日母は･･･・」から太一がすごいと分かる。
父の死を悲しんでいる家族は太一だけではない。
・母の悲しみがあるから、太一は成長したことがわかる。
・母の登場で太一のことがわかる。
・「母は穏やかで満ち足りた美しいおばあさんになった。」

どうして太一はクエを殺さなかったのかな？⑩（本時）

瀬の主と出会う前	瀬の主と出会った
・父をこえたい・村一番の漁師・父へのあこがれ・父のかたき・恨み・憎い・クエを殺したい・戦う	・穏やかな目・父、じいさと命を繋いだ・千匹に一匹の命・海に生きる・海を守る・一人前の漁師になった

「村一番の漁師」と「本当の一人前の漁師」は同じなの？

「海の命」という題名なのかな？⑪
・一人前：クエを殺さなかった・「命」の意味を考える。：殺さなかったことで生みの命を守った。
・相手・自分の命：~~いつか死ぬでも心は生き続ける道を進んだ。・命があるから人生はある。~~

登場人物の関係等に着目して自分の考えを広げることに取り組み違いの意見を交流しようとしている。【態】

６．本時について

本時目標　　行動や様子を表す表現に基づいて考えをもち、友だちと伝え合うことによって、太一の気持ちの変化を捉えることができる。

学習活動	主な支援・留意点　◆評価【観点】
どうして太一はクエを殺さなかったの？ 太一 → 太一 父をこえたい。 村一番の猟師 父にあこがれていた。 父のかたき クエを殺したい 憎い・恨み 瀬の主　クエ 穏やかな目（クエ） じいさ・父と命を繋いだ 千匹に一匹の命 命のサイクル 海が命全体 海を守る 海に生きるたくさんの命	・前時までの読み取りや、叙述をもとにして話し合うことができるようにする。 ・児童から出てきた言葉をもとに、考えの違いが視覚的に捉えやすいように板書を整理する。 ・根拠を基に自分の考えをグループで交流する ・グループで話し合ったことを発表する。 ・グループの発表を全体で共有し考えを深める。 ・「クエに会った太一」と「クエに会う前の太一」の変容を比較しながら太一の気持ちの変化・葛藤・命ついてそれぞれの考えの違いに気付けるようにする。 ・本時の最後に、「太一にとって村一番の漁師と一人前の漁師についてをオクリンクに入力する時間をとる。話し合いを生かした考えが書けるようにする。 ◆行動や様子を表す表現に基づいて考えをもち、友だちと伝え合うことによって、太一の気持ちの変化を捉えることができる。 【思考・判断・表現】

◆読み取ったことや叙述に基づいて考えを伝え合い、自分の考えと友だちの考えとの共通点や相違点に気付き、太一の気持ちの変化を自分なりに捉える姿をひびき合いの姿とする。

７．実践を終えて

《単元について》

本単元は、子どもたちの初発の感想から学習問題を作っていった。子どもたちが話し合ってみたいという意欲をもった感想が「どうして太一はクエと戦わなかったのだろう？」という問題であった。また、「おとうと違う漁の仕方なのに、なぜ与吉じいさに弟子いりしたのか？」「おとうは海のめぐみを大切にしたのか？」という感想をもった子どもも多かったので、場面ごとにそれぞれの問題について話し合っていくことにした。

話し合いを重ねていくと「与吉じいさは海を大切にしていたから１日２０ぴきしか捕らなかったんだ。」「与吉じいさの千匹に一匹とおとうの海のめぐみを大切にしたのは同じ気持ちだと思った。」と学習問題を解決していくにつれて話し合いの楽しさも味わっていった。一方で話し合いをしていても読みを深められない子どももいた。そこで、物語の内容を整理し、改めて内容を確認した。そうすることで学習問題について疑問を強くもつようになっていった。

《子どもについて解決したい問題になっていたか》

学習問題を進めていくうちに「どうして太一はクエと戦わなかったのだろう？」という学習問題は、子どもたちにとって話し合いを解決したい問題となったと考えられる。みんなの感想や疑問から話し合いながら解決したいという思いをもち、話し合いにより理解を深めるという学習を進めていったからだ。単純に場面を読み進めていくだけではなく「どうしてなんだろう？」という自分たちの疑問（学習問題）をもとに話し合いながら学習を進めていくことで、「知りたい」という気持ちを持ち続けていくことができた。また、みんなで物語の内容を確認することで、中心人物の気持ちの変化に気づいた。本文には、「クエはおとうに見えた。」とある。そこから「どうして太一はクエを殺さなかったのか？」という強い疑問につながり、解決したい問題となった。子どもたちの考えでは中心人物の太一は「おとうに見えたと物語にはある。」「与吉じいさの千匹に一匹という言葉を思い出した。」「おとうは海で生きて海に帰ったから、（海の食物連鎖）海のいのちを大切にしていたと思う。」という考えに分かれた。本時では、その考えを話し合うことで解決したいという意欲が高まっていった。

《ひびき合いについて》

クラスのみんなの考えがわかるように、オクリンクで初発の感想や話し合いたい内容を入力した。入力後は即時に全体で共有し、それぞれが気になる児童の感想、考え、話し合いたいことについて質問しながら交流することができた。本時もオクリンクで「どうして太一はクエと戦わなかったのだろう？」という話し合いたい内容について自分なりの考えを根拠をもとに入力し、4 人グループで共有し確認しグループで出た意見を発表した。この時点で、友だちの考えを知ることができた。はじめに「クエはおとうに見えたから殺さなかった」という考えから話し合いを進めた。次に子どもたちから「おとうの海に感謝」「海の命＝食物連鎖」「千匹に一匹という与吉じいさの言葉」という発言があり、本文を根拠にして自分の考えを膨らませ話し合いが進んでいった。子ども同士での相互指名を続けていったが、キーワードとなる「おとうはクエと戦って死んでしまった。」「太一はクエと出会ったが戦わなかった。」という考えをもっている子の考えから、物語の最後にある「太一は村一番の漁師であり続けた。」からおとうを超えられなかったのに「どうして村一番の漁師になれたのだろう。」と子どもたちの話し合いにゆさぶりをかけた。そうすることで子どもたちが自分の読み取りや考えを一旦整理したり改めて考えたりすることができた。

《成果と課題》

子どもたちの感想､疑問から学習問題を作り､話し合いを進めていったことが解決したい問題になった。毎時間の授業の板書を写真に収め、それをテレビに映しながら授業を進めた。こうすることで、主人公の気持ちに気が付く手立てとなったと考えられる。本時では、今までの学習の写真を模造紙にまとめた。そうすることで学んできた流れを全体で確認することができた。グループの話し合いでは積極的に考えを伝えようとしている子どもが多く、いつも発言しない子どももグループでは考えを伝えることができた。
話し合いの中の子どもの言葉から「太一はクエを殺したかったのか、殺さなかったのか？」ということについて立ち止まり、考え話し合うことで整理されたと思う。板書では、子どもの発言を構造的に作ることで板書を確認しながらクラス全体の話し合いが進んでいく。そこで、子どもからの発言を「こういうことなんだね。」と確認し、色を使いながら構造的に板書を作っていくことで子ども自身に気づきが生まれ自然と話し合いに繋がっていったと考えられる。

話し合いの場面では、途中で一旦考えてノートにその考えを書くことで、話し合いに深まりやひびき合いが深まったと感じた。また、本時の最後にクエと戦わなかった太一は「どうして村一番の漁師であり続けられたのだろう。」と教師からの問いかけとなってしまったが、「今日の話し合いでどう思ったのか」を本時の最後にノートに書くことで次時の話し合いに繋がることの大切さを感じた。

オクリンクの活用は適材適所での活用が望ましいことは理解している。今回の単元ではそれぞれの考えを即時に全体で共有でき、ノートに書くのが苦手な子どもたちにとっては自分の考えを表現しやすいという利点から活用したが、活用時の吟味が必要である。今後も様々な教科で子どもたちの様子を見取り、オクリンクを活用することで今までの学びがより一層充実した物になるように試行錯誤していきたい。

今回の授業で子どもの思考の流れを考えることや、教師がもっと深く教材研究することで、作者の願いや思いを捉え子どもたちを物語の楽しさに誘うことができたと考える。